ウォルター・デ・ラ・メア

1　亡　霊

「戸をたたくのは誰」　「それはわたしよ　昔は美しかった
　でも　元通りになれるとは夢思えない
暗い山査子の根元から戻って来て
　こうして戸をたたいているのです」

「しゃべっているのは誰」　「それはわたしよ　昔はきれいな声で　5
　空飛ぶ小鳥のさえずりのようと言われ
妖精エコーが川辺でこっそり聞耳(ききみみ)立てるほどの声
　あのわたしが今　優しく話しかけているのです」

「真っ暗闇だ」　「そうよ　そして寒いわ」
　「人気(ひとけ)の無い家だ」　「ああ　でも　もう戻れないわ」　10
「見ていたもの触れていたものを　わが目と唇が空しく求める」
　「それらは　もはや　あなたのものではないのです」

沈黙　ポーチにまだ幽(かす)かに
　星々の残炎が射している
暗闇の中を　希望に倦(う)んだ手が　15
　鍵を　閂(かんぬき)を　錠前を　まさぐる

顔が覗き込む
　薄暗い夜が　空(くう)なる混沌の中に輝く
あるものは　ただ　茫漠(ぼうばく)たる悲しみ
　甘美なる欺瞞の跡形も無し　20

（山中光義訳）